

全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名：文学と芸術

部会長名：寺内直子

作成者名：寺内直子

概要（2 ページ）

「文学と芸術」の各講義は、人が生きる上で必要な豊かな感性と深い叡智を育むために不可欠な存在である文学と芸術を紹介している。具体的な作品群や作家群の紹介を通して、人類史の長い歴史の中でそれらの作品群が果たしてきた積極的な意義、またその複雑で多面的な流れを知り、過去に人類が築き、また現に築き上げつつある文学的・芸術的なものの豊饒さについて、基本的な見識を身につけることを目標とする。また、人間の豊かな感性と深い叡智をはぐくむ言語能力や知覚能力の根源的な重要性と意義について、正確な認識を獲得することも目標とする。

（1）組織・運営について

部会は人文学研究科、国際文化学研究科、人間発達環境学研究科の専任教員により構成されている。人文学研究科 13 名で前・後期 4 コマずつ（計 8 コマ）、国際文化学研究科は 4 名で前・後期合わせて 11 コマ、人間発達環境学研究科は 7 名で前・後期で 2 コマずつ（計 4 コマ）を担当している。しかし、構成員の定年退官と公認不補充により、年々構成員が減少しており、従前のコマを維持することが難しくなっており、かつ、非常勤講師を充当する費用も枯渇している。

（2）実施状況について

1. 開講科目

「文学と芸術」は、さらに具体的には、「文学 A」、「文学 B」、「言語科学 A」、「言語科学 B」、「芸術と文化 A」、「芸術と文化 B」の 6 つのカテゴリーに分かれている。

1) 「文学 A」、「文学 B」のうち、「文学 A」では、世界のさまざまな文学的伝統の背後にある文化的背景やそれぞれの展開についての文学史的知識を学ぶとともに、すぐれた作品の味読を通して、文学作品を味わい楽しむ能力を高めることを目指している。また、「文学 B」では長い歴史を持つ日本の文学について、その展開の多様性を理解し、各時代の背景や各ジャンルの特質を知るとともに、すぐれた作品の味読を通して、文学作品を味わい楽しむ能力を高めることを目的としている。H29 年度は「ボブ・ディランの詩学」「古典文学からみる日本の思想」「日本の歴史叙述」などの授業が開講された。

2) 「言語と文化 A」、「言語と文化 B」では言語の言語学的特質について学ぶとともに、言語と文化の関係の多様なありようについて多面的に考察し、言語という身近な存在がもっている文化的意味について理解を深めることを目的としている。H29 年度は「日本語の歴史」「言語を学ぶためのフィールドワークの基礎」などが開講された。

3) 「芸術と文化 A」、「芸術と文化 B」では、さまざまなジャンルの伝統芸術について、その成立・展開の歴史を学ぶとともに、現代的意義を理解し、すぐれた芸術に接しながら学問的方法に基づく鑑賞の仕方を学ぶことにより、ゆたかな鑑賞力を養うことを目的にしている。H29 年度は、「芸術学・表象文化論の基礎」「日本映画の基礎」「ロダン以降の彫刻表現」「茶の湯と煎茶」などが開講された。

2. 教育方法の工夫

このように各分野にはさまざまな視点、方法論が含有されているが、「文学と芸術」部会では、各講師が、それぞれの分野の性格、状況に応じて、それに適したメディアと資料を使いながら、特質をわかりやすく説明し、深い理解が獲得できるよう、工夫して

いる。

① 情報の提示

伝統的には板書、最近では PP のプレゼンにより、授業内容をわかりやすく提示することが一般的になっている。それに加え、適宜プリントを配ることにより、確実な情報の伝達に努めている。また、近年は、文学作品や思想等、文字情報を主たる媒体とする分野の講義にも、ビジュアル情報を提示しながら、作品、思想の背景をわかりやすく提示することによって、作品本体の理解がより深まるよう促している。

ただし、プリントの配布は、プリントだけ持ち帰り授業を聴かない学生を出現させ、話を聞いてメモをとる能力が涵養されないなどの好ましくない状況も招いている。

映画や音楽、舞踊などの身体表現による分野では、実際の動画や音による作品の提示は不可欠である。その他、教室のインターネット環境の向上により、各種の Web サイトを授業中に活用することもできるようになってきた。

② 学生の理解度、ニーズのフィードバック

学生の授業内容の理解度については、期末試験やコメントペーパーによって知ることができる。それによれば、普通にまじめに出席している学生は、理解度が高く、授業全般の感想もおおむね良好である。逆に、出席率の低い学生のコメントは、授業の実態を反映していないものが多く、これらを「授業評価」に使用するのは問題が多い。ちなみに、機械的にクラスが振り分けられる前期の学生評価は 3 点台の後半であるのに対し、自分の興味でクラスを選択できる後期の評価が 4 点台の半ばであるのは、興味と学習意欲、成績の相関を表している。

(3) 課題について

教育部会及び国際教養教育院における今後の課題として、後任人事の凍結により、一部の部局では共通教育授業に十分に教員を派遣できず、非常勤講師を雇わざるを得ない状況が頻出している。かつ、非常勤講師の予算が十分確保できない現状では全学負担が必要だが、それが実現されていない。

教室の設備については、年々改善しているようだが、時折、一部の教室の不具合が報告されている。H29 年度については、2Q の教室(B102)のマイク装置が毎授業時に故障を起こし、授業の後半はマイクなしの状態で作らざるを得なかった。早急に修理をしてほしい。

(4) 総合所見

学生の注意を持続させるために、一部の教員は、講義の授業でも、質問に答えさせる、感想や意見をきく、作品の一部を学生に読ませる等々、双方向のやりとりを積極的に導入することにより、学生の関心と興味を引き出す工夫をしている。しかし 100 人以上のクラスでは、教員個人の努力でそれを達成するのは難しく、TA の優先的割当など、制度上のバックアップが必要と考えられる。

国際教養教育院の予算削減は共通教育の弱体化を招いている。またクォーター制は、試験の回数が増える一方、一授業の内容が薄くなり、現場の教員がいくら努力しても、教育効果は従来ほど期待できない。クォーター制には教育上のメリットは感じられない。

項目・観点ごとの記述

基準 5 教育内容及び方法

- 5-1 【教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であること。】

5-1-③： 教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか。

観点に係る状況（150字以上）

文学、思想、言語、諸芸術など、多岐にわたる分野のテーマがバランスよく配置されている。文学では、日本と世界の文学、言語では、純粋な言語学から、文化と生活に密着した今日的な言語の展開を扱う講義、芸術では、伝統音楽、茶の湯から、コンテンポラリーアート、写真、映画などの現代メディアによって成立した芸術まで、最新の社会動向、学術成果を踏まえつつ、多様なコンテンツを学生に提供している。

根拠資料

シラバス、自己評価点検表

5-2【教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されていること。】

5-2-①： 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

観点に係る状況（150字以上）

本部会では、主として文学、芸術をあつかっているが、近年は、文学作品や思想等、文字情報を主たる媒体とする分野の講義にも、ビジュアル情報を提示しながら、作品、思想の背景をわかりやすく提示することによって、作品やジャンル全体の理解を促している。さらに、映画や音楽、舞踊などの身体表現による分野では、実際の動画や音などを提示することが不可欠であることは言うまでもない。また、講義の形態ではあるが、質問に答えさせる、感想や意見をきく、作品の一部を学生に読ませる、歌わせる等々、双方向のやりとりを積極的に導入することにより、学生の関心と興味を引き出す工夫もされている。

根拠資料

シラバス

5-2-②： 単位の実質化への配慮がなされているか。

観点に係る状況（100字以上）

コメントペーパー、レポートの提出、期末試験などによって、学生の理解、あるいは復習を促している。また、授業によっては、授業中に作品を読ませる、意見を述べさせるなど、アクティヴ・ラーニングの手法を取り入れることによって、より深い理解へと導く努力をしている。

根拠資料

シラバス、コメントペーパー

5-2-③： 適切なシラバスが作成され、活用されているか。

観点に係る状況（50字以上）

シラバスは全体の構成や扱う内容がわかるように、書かれている。また、スケジュールもわかるように組み立てられている。成績評価方法なども明確に書かれており、学生は何を学習し、どのような作業が自分たちに求められているのかが理解できるようになっている。しかし、残念ながら、シラバスを読まない学生が多い。シラバスを必ず参照するように促す手立てが必要である（これは教員個人の努力を超えている）。

根拠資料
シラバス、コメントペーパー

5-2-④： 基礎学力不足の学生への配慮等が行われているか。

観点に係る状況（100字以上）
個別の質問・相談を受け付けた。コメントシートによる質問については、次の授業で回答するなど、質問事項をクラス全体で共有し、回答するよう努めた。また、授業内容に関連する展覧会、音楽会など、各種イベントや、書籍、CD、DVD等の情報を適宜紹介している。外国人留学生については、期末試験の英語での回答を可とするなどの措置をとった。

根拠資料
教員の自己点検票、コメントペーパー

5-3 【学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっていること。】

5-3-②： 成績評価基準が策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。

観点に係る状況（100字以上）
成績評価については詳細にシラバスに示されている。成績については、平均点を考慮した問題の作成やレポートの採点に努めている。また成績結果等の問い合わせについても、メールや面談等によって学生が納得できるよう説明を尽くしている。

根拠資料
シラバス、アンケート評価、成績評価の分布表

5-3-③： 成績評価等の客観性、厳格性を担保するための措置が講じられているか。

観点に係る状況（100字以上）
成績については、出席状況の把握（管理）、コメントペーパーの内容による学生の授業への関心度チェック、平均点を考慮した試験問題の作成・採点を行っている。レポートの採点も、問題設定のキーワードに照らして、内容をよく理解しているかどうかをチェックしている。

根拠資料
シラバス、成績評価の分布表、アンケート評価

基準6 学習成果

6-1 【教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっていること。】

6-1-②： 学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか。

<p>観点に係る状況（100字以上）</p> <p>文学と芸術は、一般の実学的世界ではあまり関係がない分野と思われがちであるが、教員は、身近な生活や思考と関連付けながら、これらの分野の魅力や必要性を説くよう努力している。学生のアンケート評価は平均すると4点以上であり、大学生としてまなぶべき教養の習得が達成されていると判断される。</p>
<p>根拠資料</p> <p>アンケート評価、コメントペーパー</p>

基準7 施設・設備及び学生支援

7-1 【教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されていること。】

7-1-④： 自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。

<p>観点に係る状況（50字以上）</p> <p>講義教室の施設は、プロジェクターやAV機器の導入、インターネット環境の整備などが行われている。また、図書館の資料、学習室などの整備により、自主的学習環境は年々向上している。ただし、時折、一部の教室の不具合が報告されている。H29年度については、2Qの教室(B102)のマイク装置が毎授業時に故障を起こし、授業の後半はマイクなしの状態ではらざるを得なかった。早急に修理をしてほしい。</p>
<p>根拠資料</p> <p>現場の観察、実際の使用</p>

7-2 【学生への履修指導が適切に行われていること。また、学習や課外活動等に関する相談・助言、支援が適切に行われていること。】

7-2-①： 授業科目のガイダンスが適切に実施されているか。

<p>観点に係る状況（100字以上）</p> <p>授業の開始時に、シラバスに添った授業内容の説明、成績評価の説明がなされている。シラバスには、講義の内容、スケジュール進行表、成績評価などが細かく書かれている。シラバスを見ない学生に対しては、シラバスを見るように促している。</p>
<p>根拠資料</p> <p>シラバス、アンケート</p>

7-2-②： 学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており、学習相談、助言、支援が適切に行われているか。

また、特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり、必要に応じて学習支援が行われているか。

<p>観点に係る状況（100字以上）</p> <p>授業内容に関連する展覧会、音楽会など、各種イベントや、書籍、CD、DVD等の情報を適宜紹介している。また、外国人留学生についても、丁寧にアドバイスをするなどの措置を取った。授業時間以外のオフィスアワーの時間なども活用するように促している。</p>
<p>根拠資料</p> <p>コメントペーパー、自己点検表</p>